

# 國學院大學學術情報リポジトリ

島尾敏雄の「ヤポネシア」論：その起源へ：  
小特集日本近現代文学・その交通と交差

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 則夫, Ishikawa, Norio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000244">https://doi.org/10.57529/00000244</a>

# 島尾敏雄の「ヤポネシア」論—その起源へ

石川則夫

## はじめに

二〇〇八（平20）年十月三日から七日にかけて初めて奄美大島を訪れる機会があった。この旅は特に島尾敏雄関係資料の披見や、実地踏査などを目論んでいたわけではなかったのだが、旅行前の下調べなどしている間に、どうしても島尾敏雄の記した文章に触れることにはなるのであり、また宿泊地として名瀬市（二〇〇六（平18）年以降は奄美市）内に決め、奄美大島の歴史や文化を見て回っていると自然に島尾敏雄の足跡を辿るこ

とになったということである。初めて見聞することも多く、改めて島尾作品を読み直す契機ともなり、旅行後に、私なりに気づいたところの幾つかを私的な文学研究会などで簡単に報告したこともあった。また同年十二月六日（土）には日本近代文学会東北支部からのお招きにより、偶然にも島尾敏雄の父祖の地、福島県南相馬市の小高にてお話する機会を得たが、この旅の経験と島尾敏雄作品との関連については稿を起すこともなく、既に八年間の月日が流れたままである。しかし、日本列島の周縁からの眼差しという論点を設定すれば、私の内にはその年の経験が島尾敏雄という表現者の文章と相まって特異なイメージ

を形成する。それについてこの機会に記しておこうと思う。

さて、奄美大島とはどこにあるのか。その名は知られていてもその島の位置をすぐ思い浮かべられる人は実は意外に少ないのである。奄美大島は屋久島と沖繩とのほぼ中間に浮かぶ島嶼群であり、鹿児島県に所属しており、行政区としては長らく鹿児島県大島郡ということだったためか、県内では奄美を略し「大島」と呼ばれるのが普通のようなのである。そして鹿児島以南の島嶼群といえば南国、南の島という印象で一括されるところだが、各島々には独特な表情がある。たとえば種子島は鉄砲伝来と宇宙センターで知られ、その南の屋久島は縄文杉が話題になり、世界自然遺産に認定されてから観光ツアーも盛んである。そうして奄美大島と聞けば、大島紬、黒糖焼酎などが名産品として思い浮かぶ人もあるが、それ以外の文化遺産や風俗習慣などはあまり知られてはいないし、近年流行の兆しを見せた「島唄」あたりが目立ちつつあるが、その他の多くは観光産業的な広告宣伝としてもマイナーな位置づけに過ぎないのではなからうか。南の島のマリンスポーツスポットとしての観光資源の開発、宣伝も派手なものではなく、隣の沖繩に観光客は流されがちになっっているのが現状である。つまり、ただ南島そのものと思わせられるような手つかずの自然は豊富である。もちろん、先の

大戦前後を境にして島の暮らし、生活様式に変化があったのは否定できないにしても、かつて島尾敏雄が暮らしていた頃と、島の姿、人々の暮らしぶりの根底はそれほど変わっていないのではないか。そんなふうに思わせる島であった。

### 一、島尾敏雄と奄美大島との関わり

まず年譜から確認していくと、一九四四(昭19)年十一月、二十七歳の時に第十八震洋隊隊長として加計呂麻島呑之浦に着任したのが奄美大島との出会いである。翌年八月十三日に出撃命令を受けるも待機したまま敗戦を迎え、島を離れる。この間に大平ミホと出会い一九四六(昭21)年三月、二十九歳で結婚する。その後、父の家があつた神戸に暮らし、同人誌活動を始めるが一九五二(昭27)年に東京へ転居する。そして一九五五(昭30)年十月に再び奄美大島名瀬市へ転居するまでの三年間の東京生活が『死の棘』の背景となることは周知の通りである。奄美大島は一九五三(昭28)年十二月二十五日に沖繩に先立って本土復帰したが、その直後に島尾は奄美大島へ戻ってきたことになる。この一九五五(昭30)年十月から、一九七五(昭50)年四月に鹿児島県指宿市へ転居するまでの二十年間が島尾

にとつての奄美大島生活の第二期ということになるが、この二十年間が戦中、戦後の自己を問ひ直し、見つめ直す時期でもあり、また奄美大島を中心とした南島を日本列島から環太平洋の東アジア文化という拡がりにおいて捉え直すという時期にも当たっていたことが興味深い。つまり、一方では『死の棘』（一九六〇（昭三三）年）や『出発は遂に訪れず』（一九六四（昭三九）年）の執筆、刊行という自己内対話の結果があり、他方、「南島」、「琉球弧」、「ヤポネシア」という概念の創出と拡張を執拗に反復、発信した仕事が残っているわけである。

また、奄美大島での公的な仕事としては、一九五七（昭三二）年に鹿児島県職員となり、奄美日米文化会館館長として勤務。この会館はアメリカ文化の紹介を中心に活動したようで、映画上映会やアメリカの雑誌の閲覧などを主としていた。翌一九五八（昭三三）年には鹿児島県立図書館奄美分館館長を兼務し、分館内に「奄美郷土研究会」（当初は「奄美史談会」の名称。現在も活動中）を設立した。この研究会の活動は奄美の歴史と文化の価値と意義を島内外へ知らしめる大きな役割を担ってきたものである。特に奄美の歴史の文字資料として残ったものの収集や、古老からの口頭伝承の聞き取りなど歴史学・民俗学的な研究の土台を築いた点で注目し値する仕事である。この島尾

の活動は一九七五（昭五〇）年四月に分館長を辞するまで継続された。

## 二、奄美大島からのまなざし——南島・琉球弧・ヤポネシア

島尾と奄美の時系列上の関わりは以上のようにまとめられるが、それとは別に自らが奄美大島へ誘われていく内面的な契機をも、島尾自身は追求して止まなかったようである。まずは東洋史、中国文化史を専攻していた歴史研究者としての関心の動きとしてそれは現れている。十三世紀には琉球王国の支配下に置かれ、十七世紀には薩摩藩の直轄地となり砂糖黍栽培で莫大な利益を搾取され、戦後はアメリカ軍政下におかれていたこの島への想いは、まずは島の歴史を発掘しようという興奮に満ちていた様子が見て取れる。

貧困は島の日常であり、青年子女は島を捨ててヤマトに行きたがる。出て行けば多分島へ帰ろうとはしない。いや帰ることができない。島びとは島の袋小路の生活を呪っているようにさえ見える。そしてこの島はかつて琉球王国の

下風に立ち島津藩に搾取され重ねて敗戦後つい先ごろまでアメリカの見放された直接統治を受けた歴史しかない。いや民衆の生活はあるが史料は埋滅し歴史の編纂は忘れ去られた。この島の歴史が為朝伝説や平家伝説でうら悲しい序章が書かれているに過ぎないとは！

しかしこれらのことは逆に私を興奮させる。ここは未知の領土なのだ。そこに埋藏された宝は発掘されることを待ち望んでいる。「奄美大島から」昭和30年12月・全集<sup>⑩</sup>

しかし、一九四四（昭19）年十一月、二十七歳の時に第十八震洋隊隊長として加計呂麻島呑之浦に基地を設営し、そこへ百八十三名の部下とともに着任した時、すなわち特攻隊基地への着任という状況で初めて奄美大島に対面した時の隊長・島尾敏雄中尉の眼差しには何が映っていたのか。もちろんそう遅くはないはずの隊員たちの戦死と隊長としての自らの戦死を前提とした眼に映った自然はいかなる姿を見せていたのだろうか。

十年前、三十噸の焼玉漁船で、この港（注・名瀬港）にいらってきたとき、その無線塔をどんな気持ちで眺めたのだったか。それを正確にもう一度なぞってみることはでき

ないが、そのときの私には奄美大島は上古の霧にとざされていた。仏教も儒教もこの島を覆うことができなかったと考えられた。転勤行李の底に私は岩波文庫版の「古事記」を持っていたが、奄美の島の中でそれを読みかえすとそれが古代の書物であることを忘れた。そこに書かれている世界はそっくり島の現実に生きていて、そのときの私たちを包んでいると考えたのだった。

（「名瀬の町、その最初の印象と町のすがたのあらまし」  
昭和32年5月・全集<sup>⑩</sup>）

持参した『古事記』を奄美大島で読み返すと、その「仏教も儒教も」ない上古と同じ世界を奄美の現実として感じ取ったという。そして戦後、再びの奄美大島訪問、そして移住は、周知のように『死の棘』に描かれた夫婦・家族関係が前提となつているわけで、これは極めて私的な事情ではあるが、またそれだけに家族とともに生きていくための移住として特攻隊とは逆向きの意志を抱え込んでいたはずである。いわば内地での家族生活の構築に失敗したことが南島への心の傾きをよりいっそう強めていったのではあるまいか。すなわち、島尾の関心は奄美大島にとどまらず、沖繩、宮古へも展開され、「南島」という「日

本という世界の一つの「区域」へと促されていくのである。

私は南の島を意味する「南島」といういいかたが好きだ。鹿児島と台湾のあいだの海の中に、花かざりのように、ころよいたるみを見せて点々とつらなる島々に、人々はいろいろな名前をつけてきた。……これらの島々をひとまとめにして、「日本という世界の一つの区域」として考えた誘惑をしりぞけることができない。その場合、私には「南島」という言い表しかたが、生き生きとよみがえってくるのを感じる。

〔南の島での考え〕昭和34年8月・全集⑬②

現在では私は、大島のほかの四つの島の徳之島も喜界島も沖永良部島も与論島もひととおり見てきましたので、それぞれの島の輪郭をひとつずつ描くことよって、大島の対比の中で琉球弧の北の部分としてのアマミをつかみたいという期待に充たされております。

〔離島の幸福・離島の不幸〕あとがき

昭和35年4月・全集⑬⑥

地図を見てもわかりますが、日本は島国であることから逃れることはできません。島国というのは海にかこまれていきます。太平洋は非常に広い海洋であつて、その中にはいろいろな島があります。ことに南太平洋の方に島が多いのですが、その島々に住む人たちの生活は、お互いに似かよつた性質を持つていのではないかと考えます。日本もそのひとつではないか。南太平洋にはポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、インドネシアの島々がありますが、それと同じように、南太平洋のひとつの島々のかたまりとして私は、日本列島があるのだという気がするのです。それで、自分でヤポネシアという名前をつけてみました。

〔私の見た奄美〕昭和37年6月・全集⑬④

「南島」、「琉球弧」そして「ヤポネシア」という概念へと島尾の関心は抽象度を高めていった。ここに所謂島尾敏雄の「ヤポネシア」論なる思想が展開されることになったのである。そしてまた、この「ヤポネシア」という概念が論壇において言及、引用されるに従つてそのたび毎に内容を増加しつつ、極めて政治性の強い概念、用語として流通していったことは言うまでもないことである。

こうして島尾の奄美大島への移住・生活を戦中、戦後の二期に分けてみれば、その主体のあり方の相違点は明らかであろう。すなわち、震洋特攻隊長としての眼差しには死の世界が隣接し、ミホの治癒を島の風土に託すほかなかった戦後の眼差しには、家族の生への狂おしいほどの、しかし希望の兆しもおぼつかないという苦の世界が横たわっていたに違いないのである。そして、この二つの眼差しの交点に立ち現れている奄美大島とは何だったのか。そのことについて思い巡らしたいというのが本稿の目的である。

### 三、南島論の潮流の中で

沖縄を中心とした琉球列島、南西諸島の風俗、民俗文化に注目し、これを調査発掘して日本文化史の構想に再考を迫った思想的潮流は、沖縄学の祖と言われる伊波普猷、柳田國男、折口信夫らの戦前からの動きを初発として、戦後の奄美大島、そして沖縄の本土復帰という政治的配置を背景に、日本再発見の指向性を大きな背景としながら構築されていったのは周知のことである。そうした額縁の内側に島尾の「ヤポネシアの根っこ」(昭和36年12月)が組み入れられ、奄美大島在住者の視点から発声

された「南島論」として注目されて来たことも記憶に新しい。この島尾による発想は民俗学者・谷川健一、また吉本隆明による共感とそれぞれによるさらなる展開へと弾みをつけ、日本文化、日本史、日本国の相対化<sup>〔1〕</sup>へ邁進しつつも、やがて「南島イデオロギー」の危うさの胚胎、反国家イデオロギーとしての骨格の脆弱さなどを批判されることにもなった。それを一言で言い表すならば、国家論の欠如であり、文学者の個人的な印象記、島尾自身が多用する「感受」の位相に止まっているというものだった。「ユリイカ」(一九九八(平10)年八月)の「特集・島尾敏雄」は「ヤポネシア」論の是非をめぐる好論が多く掲載されているが、たとえば小倉虫太郎は島尾の仕事の位置づけられかたを次のように批判する。

これまでの一般的な戦後文学史の流れの中での島尾夫婦の組み合わせは、しばしば典型的な帝国ノスタルジー、あるいは植民地的な「語り」の中に包摂されて来たことは強調されるべきであろう。曰く、古代的な島の巫女とヤマトから来た天皇の名代(マレビト)との死への旅へと突き抜けていく無償の愛、などといった語り方である。それらのイメージは、端的に柳田國男―折口信夫―吉本隆明といっ

た、古代日本のイメージを「南島」の「基層」に投射するロマニストたちの一連の語りの中にも接合されてしまうものであった<sup>2)</sup>。

また、奄美大島・南島・琉球弧に見出される文化を「ヤポネシア」と名指しして日本の基層文化の名残りを見なし、それをもって近代日本国家の相対化を試みようとする姿勢自体が、たとえば琉球処分や復帰論、反復帰論などの背景にある「近代が抱え込みかつ抑圧してきた何かを想起すること」なくひたすら「忘却」し、古代憧憬ロマンに浸り続けることに他ならないと、その楽観的な見通しを指弾している。一方、奄美大島在住者の視点から検討を加えた森本真一郎は「ヤポネシア」と一括りにされることへの違和感をこう表明する。

島尾は、「アメリカのリユウキユウ」を「日本の沖縄県」として再併合するために、明治十二（一八七九）年の琉球処分以来くりかえされてきた琉球と日本との「民族」的同一質性（日琉・日奄同祖論）を、隣の奄美大島から発信しつづけた。その核となったのが、柳田国男や学会の研究者たちが戦後もくりかえし展開してきた「はるかな古い日本の

すがた」<sup>3)</sup>。「南島」であり、それは島尾の「日本以外のなにもでもない日本の中の日本」<sup>4)</sup>（琉球弧）<sup>5)</sup>。「琉球文化圏」<sup>6)</sup>「アマミ・オキナワ」であった。島尾の（琉球弧の視点から）は、オキナワの領土を戦後の新日本にたぐり寄せて再併合するための思想（政治）的支柱だった。くりかえすが、一九七二年の「沖縄の日本復帰」という政治上の内実は、近世に薩摩が、近代に大日本帝国が侵略した殖民地である「琉球王国」の再併合であった<sup>3)</sup>。

すなわち、「島尾が幻想する共同体は、「国家」の域をこえることはなかった」のであり、また、奄美の昔話などを採集し、民俗文化を調査しながら「二十年間も奄美に住みつき、小説などを書きついできた島尾だが、本人の意志にもかかわらず奄美の歴史や民俗を題材にした小説は、彼の生涯でついに一本も著すことができなかった」とも述べており、島尾の奄美理解の恣意的なありようと結局は「ヤポネシア」を誣い上げながらもその内実を小説家としての表現行為に結実しえなかつたところに、「ヤポネシア」論の真の挫折を見て取っているのである。たしかに島尾の「ヤポネシア」論はいわゆる理論としての構造を持つてはいなかつたし、奄美大島での個人的な経験を核とし

て沖縄、琉球弧へとその視野を拡げていったが、その島々での歴史、民俗的な根拠付け自体が不足していることは否めなかった。さらに、二〇年間以上にわたって暮らした奄美大島のあり方に対しても島尾自身が自問自答に陥らざるを得なかった時期も少なくない。たとえば、島尾の父祖の地である福島県南相馬市で島尾敏雄研究を続けている詩人・若松丈太郎はこう記している。

一九七〇年、島尾敏雄は沖縄の那覇で「ヤポネシアと琉球弧」という講演をおこなう。ところが、その直後に書いた「那覇に感ず」で、講演しながら自分の言葉が「なぜこんなに手ごたえなく空転してしまう」のかと感じたと述べた。言葉が空転している、手ごたえがない、自分の言葉が空っぽだと、ヤポネシア論を語りながらそのむなしさに落胆の思いを感じたというのである。<sup>4)</sup>

この島尾自身の揺れについては先に引いた森本眞一郎論も同様にこう指摘する。

「島のことかわからなくなった」なんにも見えない、

と試みてみたくなるほどだ「もう島どころではない、と気が変になりそうなのだ」(「奄美の島から」・一九七一年)

「琉球弧は、日本だ日本だと言いつぎてきた」つまり、南島が持つところの特質は、ヤマト(本土)で展開された日本国家というものよりも時間的、空間的にもっと長い広い何かであるように思う」(「琉球弧に住んで十六年」・一九七一年)

「実のところ今南島について何も書きたくない気持ちになっていく」(「島尾敏雄非小説集成第一巻あとがき」・一九七三年)

島尾はここで、「南島」と「日本」との関係についてあきらかにはころびをきたしている。しかし奄美から日本の鹿児島にUターンしたとたんに癒されたのだろうか、ふたたび(琉球弧)や(ヤポネシア)概念の創始者として復活する。それでもエッセイや対談のみで、「島・琉球弧・南島」を客体化した小説を生むことはなかった。

このように島尾自身が自ら創出した「ヤポネシア」概念を「南島」「琉球弧」そして日本列島全体へと拡張していく過程で問

題化していった理論的展開の困難さと、同時に襲ってきた自らの経験の内実の再確認要請に戸惑い、半ば絶望することさえあったのであり、逆に言えば島尾の「ヤポネシア」論は歴史・文化理論上の整合性や国家論としての射程においての有効性などを問われることに耐性を有しない性質の発言であったとも言えるのである。そして、この視点においても一度「ヤポネシア」論を検討しようとするれば、これは島尾敏雄という表現者・小説の書き手から湧出した言葉であったことを想起し、この表現者の言述の働きにおいて「ヤポネシア」という言葉の力を測定することになるはずである。簡単に言い直せば、この言葉を理論概念としての有効性において点検するのではなく、その動機の起源から展開への過程に現れた機能を、記述された表現において問うということである。さて、もちろんこうした指向性を示唆していた考察もすでに多く、その経緯をこれから見ていきたい。

#### 四、「ヤポネシア」論の動機をめぐって

「ヤポネシア」という言葉が島尾の文章に現れたとき、いち早くこれを取り上げて自らの理論装置に組み入れたのは周知

のように民俗学者・谷川健一（「ヤポネシア」とは何か）一九七〇（昭45）年）であったが、この装置が谷川自身の学的展開において変質していったこともよく知られている通りである<sup>⑤</sup>。しかし、谷川は一九七三（昭48）年の「國文學」誌上で「島尾敏雄における南島」と題する一文を寄せて「ヤポネシア」論の成立とは島尾の戦後における「第二次南島体験は彼に一種の抽象化の作業をあたえることになった」ことによるとしながらも、この概念への自らの思い入れの変化も表明しつつ、ある含みを持たせた記述を見せていた。

アポロのめぐみゆたかな南島の生活について語るとき、私は島尾の文章の底にとらえがたい魚の影のような陰影をみとめずにはいられない。とすれば彼の語った部分よりは、語らなかつた部分に関心がうごいていくのは当然である。すくなくとも彼の南島論はそうした前提のもとで読まれるべきである、と私は思っている<sup>⑥</sup>。

谷川はここでは「ヤポネシア」という発言をしていく島尾の言葉の背景への想いについて述べているのであり、この視点こそが表現者としての島尾敏雄とその名のもとに記述されていっ

た文章の特質を顧みようとするとするものであろう。つまり、「ヤポネシア」という言葉を島尾による南島文学という圏内において受容してみようということへの示唆と言えよう。そして、この視点を明確に打ち出したのが鈴木直子の論考であった。鈴木論は島尾の「南島」文化論<sup>(7)</sup>が引き起こした多様な分野への強い影響力を指摘し、かつ「奄美文化との関わりをテーマにしたと思われる「南島小説」をも含めて「南島」文学と明示した上で次のように記している。

島尾の「南島」文学は、「南島」とは何か、あるいは「南島」をどう語るか、ではなく、語ることがそもそも可能なのか、について書かれたテキストなのである。他者を「語る」行為が他者との十全な関係を築くものであるどころか、かえって他者を「名付け」支配する行為と直結しているのではない。島尾文学に通底するこうした問いが、ここにも確かに存在している。他者を「排除」も「包摂」もしないままに如何に語ることが可能か、という問題をめぐる島尾の逡巡が、彼の「南島」文学を覆っているのである。そしてこの、他者について語る行為の可能性と不可能性を追求する姿勢は「南島」をめぐるテキストだけでなく、むしろ

彼の文学の本質的要素であると考えられる。<sup>(7)</sup>

鈴木論は島尾の「川にて・島へ」という小説を分析対象とし、その「日本文化批判」とは別に、「一人称一元視点を採用した「自己批評文学」としての特質を指摘し、その批評が「競争体験」と「夫婦関係」の二つに焦点を合わせたものと論じ、「小説における「南島」を検討」することを提案する。また、同年、花田俊典論<sup>(8)</sup>は「ヤポネシア」発言の動機が、「息づまのような何か」を日本の現状に感じ「わたしはそこからどうしても抜け出したいという気持ちがおさえられない」という島尾の告白を再確認している。

彼がヤポネシア論を展開していく核にはいつも、硬直した不毛の画一性からなんとか抜け出したい、という個人的な、というより個人としての情動そのものが据えられていたはずだ（…略…）彼にあつては、それ（稿者注：南島の発見）はなによりまず「異郷」として発見されている。（…略…）「ここは未知の領土なのだ」と言い放つこと、それを彼は文学的な（ということはずまり個人的な）啓示として感応し、やがてヤポネシアとして発言した。<sup>(8)</sup>

この花田論の指摘するところに先に言及した谷川論の含みを持たせた表現を重ね合わせてもよからうし、この視点からの具体的な提案の一つとして鈴木論を捉えることも可能だろう。さて、ここで再び先の「ユリイカ」の島尾特集号に戻ってもう少し論考の紹介と検討をしていきたい。東琢磨の「きっかけ」としての「ヤポネシア」は、島尾の「南島エッセイ」の中でも「沖繩」の意味するもの（一九五四（昭29）年）に注目し、その「考古・民俗学的なベクトル以外に含んでいたもの」について考えたいとする。東論は一九七八（昭53）年、沖繩在住の文学者三名と島尾の座談会記事を取り上げて、そこで交わされた話において浮び上がる島尾の逡巡を指摘、また島尾の「ヤポネシア」構想の生起から展開への過程を詳細に調査・分析した岡本恵徳『「ヤポネシア論」の輪郭—島尾敏雄のまなざし』（一九九〇（平2）年 沖繩タイムス社）を参照しながら島尾の人間性の「複雑さ」を読み、かつ島尾の自国・他国文化への楽観的な姿勢を浮上させるが、しかし「ヤポネシア」論の危うさよりもその「きっかけ」が注意されるという。

私にはその危険性よりももっと重要なものがあるように感

じられる。それは、「きっかけ」として「ヤポネシア」を言う前の島尾敏雄の自己認識とでもいうべきものなのだろうか。彼の生活の空間とはどこだったのだろうか。神戸、奄美、東京……。島尾の場合は、おそらく、「ここ」と「あそこ」が入れかわることもあったはずだ。そう考えると、たぶん、「ヤポネシア」は、「そこ」と「あそこ」をつなぐ、生活の空間にはっきり開いた穴のようなものだったのかもしれないのだ。

そして、島尾の「ヤポネシア」論が沖繩での「反復帰論」の運動に大きな影響を与えたことについて確認しつつ、しかし「島尾の「ヤポネシア」と反復帰論とはどこかが決定的に違う」と問い返してこう述べる。

その違いはどこにあるのだろうか。私たちは島尾敏雄の「感覚」や「感受」の部分こそ幾度も読み返さなければならぬのだと思う。「戦争小説」と「幻想小説」と「私小説」の書き手こそが提示し得た「ヤポネシア」を「論」以前のところへと、初発のところへと、執拗に突き戻していくこと。それはたぶん、きっかけにあった戸惑いを忘れ

ないことではないか。<sup>(9)</sup>

では、この「きっかけ」の「初発」はどこか。それを東論は、先の岡本恵徳論が提示していた島尾⇨大平⇨ミホとの関係で生まれてきたという見解を踏まえつつ、「ミホさんという「他者」との終わりのない交渉の物語が「ヤポネシア」を生んだのだ」と結ぶのである。しかし、この「ヤポネシア」という言葉の出自、その契機についての言及は他の論考でも散見されるところであり、同じ「ユリイカ」の特集では田仲康博「他者の眼差し」が島尾の「ヤポネシア」論を「〈反〉国家論」の立場をとらない」として「むしろ、それは〈非〉国家論と言ってもいいもので、国民国家の概念を軟らかに解きほぐす」と評価し、その契機についても論じている。

ヤポネシア論が生まれてきた契機は、島尾が——本人の言葉を借りれば——「故郷喪失者」だったことにある。東北に出自をもつ彼は、幾つかの土地を経て奄美に落ち着き、南の空気にふれたことで日本の多様性に気づく。当初、奄美は「異郷」あるいは「太古」として彼の前に立ちちはだかる。<sup>(10)</sup>

この島尾の「故郷喪失者」としての自覚は東論の引用部にも通底する視点であるが、高阪薫もやはりこのことを前提として、岡本恵徳論の知見、「ミホ夫人の存在」が島尾における「文学」と「ヤポネシア」の接点となっているとするとともに共感を示してこう論じる。

私流にその接点ということを考えてみると、それはミホ夫人と出会った奄美・加計呂間島での島尾の特攻隊体験がその接点の中核を成すのであり、そこから考えて私は「ヤポネシア」論のモチーフに、島尾の戦争体験あるいはもう少しつっこんで戦争責任に及ぶモチーフ、それも加害者被害者の両面を持つコンプレックスのモチーフがあるのではないかと思うのである。つまり、戦争を介在として島尾とミホが奄美で出会い、それが創作となりその内容に「ヤポネシア」の要素が散りばめられていると考えるのである。<sup>(11)</sup>

たしかに『死の棘』の読者にとって、また、いわゆる「病妻もの」というようなレットテルを貼られて受容されてきた島尾作品の読者にとって、「ミホ夫人」の他者としての存在感は大き

く見えるし、「異郷」としての奄美⇨南島文化を体現しているのがその小説作品中の特異なイメージだと納得しやすいものである。しかし、このように極めて短絡的な私小説的解釈の還元法に注意を促す論もある。安達原達晴論は岡本恵徳論に賛意を表し、これを踏まえて考察を進めているが、『魚雷艇学生』の表現を分析しこう指摘する。

ただ、島尾と（南島）を語るとき、ある自明の事実が閉却されがちであるようにも思う。島尾の（南島）（ここでは加計呂問島）との最初の遭遇は、ミホとの邂逅に先立っている、という事実である。島の娘との運命的な巡り逢いの場や傷ついた心を癒やす生活空間、あるいは思想を紡ぐ根拠地である以上に、（南島）は特攻兵である当時の島尾にとって、「基地」以外の何ものでもなかったはずである。<sup>⑩</sup>

さらに高阪薫も「特攻隊隊長体験即ち戦争に関わる善悪・正邪・愛憎を含む体験がヤポネシア論を生んだ」と見て、そのモチーフの萌芽が読み取れるとして島尾が戦中（一九四五（昭和二十）年）に書いた「はまべのうた」、「島の果て」の二つの作品を重視している。<sup>⑪</sup>ただし、この高阪論にしても島尾敏雄の小説

作品⇨フィクションとしての言説を従来の私小説観に基づいて日記その他の記述と同水準において、事実の炙り出し作業の俎上に載せていることには留意しておかねばならないが、こうした「ヤポネシア」論研究史の様相を見てくると、理論としての不整備を論うことから、表現者・小説家としての島尾敏雄の言葉、言述の総体を参照枠として「ヤポネシア」という言葉を考察していこうという指向性が現れてきているように思われる。それは先に検討した鈴木直子の論考や花田俊典の論考がはつきりと指し示していた方向性でもある。さらに、次に挙げる安原義博の論考もまた短編「島へ」を中心に分析しながらこの方向へ歩もうとしている。

島尾文学に登場した「島」のモチーフは「ヤポネシア」構想に露呈し始めた矛盾とともに新たな展開をする。実際、「島へ」の五年後に書かれた「私の中の琉球弧」では、「今言えることは、奄美のことを私は少しもわかってなどない。いくらわかかったと思っていたのは錯覚だったか」と吐露している。ここで重要なのは、「もうひとつの日本」は依然として表現の可能性たりえているが、「島」にはもはや「桃源郷」のイメージは失われているということであ

る。むしろもうひとつの日本を知ることの不可能性へと鳥尾のヤポネシア構想は移行しているのだ。しかしまた、この自覚によって鳥尾文学は「鳥」を「文学の場所」として獲得したといえるのではないか。それは同エッセイの中の次のことばに窺えるだろう。「飛躍した言い方になるが、その琉球弧のあらわれ方は日本の、そして日本人の表現の可能性として私には写つてくるところがある。つまり出口のない日本人の表現に、ここは世界にむかつてひらかれた窓なのだという気がする」<sup>14)</sup>

このように「鳥」、「ヤポネシア」という言葉が立ち上がってきた動機において、それは鳥尾敏雄の身体を通して湧出してきた言葉、物語とともにあったものであると認識すれば、なぜ鳥尾敏雄は書き続けたのか、また、書くことが可能であったのかというところに連れ込まれていくだろう。とするならば、それは「南島」・「琉球弧」・「ヤポネシア」でなければならなかったのか。奄美大島との出会いは特権的かつ絶対的な経験であったのか。『死の棘』の読者は、妻の病と手を携えて北へ移動していく物語を既に知っている。

## 五、ヤポネシアとエミシの重なりと揺らぎ

ここまでは鳥尾の記述の中にあつて紆余曲折を経ながら徐々に獲得されていった「もうひとつの日本」への指向性が、書くことへ、言語表現化への契機として機能してきた様相を見てきたつもりであるが、一九六〇年代中頃（昭和四〇年代以降）になると、再び奄美大島を内面化して捉えようという傾向が見出せる。それは自身の中に「父や母たちの生地である東北的な感じ方や見方」が残っているという実感を基に「素朴ということ」「弱さに対する過剰なほどの忠実さのようなもの」に考えめぐらす時に「奄美と東北が気分をひとつにしているようなところ」があるのだと言う。また、そこから最初の奄美との出会いを再考し、「自分の故郷の古い時代に帰つたような気持ち」になつたこと、その感じを掘り下げると「父祖の地、福島県を通して、東北を手さぐりで触れてゆくと」「琉球弧」の鳥々とのあいだに、なにか古い日本人の心の底にあるようなものが類似の感情として流れているのではないか」（奄美・沖繩の個性の発掘）昭和45年4月・全集<sup>16)</sup>という想像へ導かれると言うのである。

そして一九七五（昭50）年、奄美大島を去ることになった島尾は「私はこの島を先験的に知っていたような気持ちになり、この島で日を送ることによって私の中の東北の血が重みを持つてくる具合であった」（「加計呂麻島呑之浦」昭和50年4月・全集<sup>⑩</sup>）とまで言い切っている。

奄美大島という南島から福島県相馬・小高へと島尾敏雄の内なる想いは遙かに回路を成して循環し始めていたということだろうか。

たとえば私には父や母たちの生地である東北的な感じ方や見方がのこっています。意識的にそれをあらわにして奄美を見ることもあります。その要素が強くはたらくときは、奄美の中に吸収されていることはまやかしだと思うのです。……と同時に中央の諸地方をとりこえて、奄美と東北が気分をひとつにしているようなところがあります。それは素朴ということを考えをめぐらすときです。率直ななにか、弱さに対する過剰なほどの忠実さ、のようなもの。

（奄美を手がかりにした気ままな想念）

私はこの琉球弧の島々と東北のあいだに、なにか類似の気

分の流れていることに気づきだした。これは学問の実証などとは関係がないことだが、その信号の感受はどうにも否めない。そして東北の背後には、これも気ままな言い方だが、アイヌ世界が透絵さながらにうずくまっているようなものだ。

もしかしたらこれは政治の裏通りの地帯などのこととかわりがあるかもしれぬ、とふと思ったことがあった。

（「琉球弧の視点から」昭和42年1月・全集<sup>⑪</sup>）

私自身初めて島に来たときに、なにか自分の故郷の古い時代に帰ったような気がしたのだ。この島が日本の根を、あるいはより素朴な、もしくは純粋な私たちで保っているのではないかと思ったのだ。

このような感じを受ける土地は、奄美ばかりではないかもしれない。例えば私は「東北」にも同じようなものを感じる。私の父も母もその先祖たちも東北の人だが、私自身は東北を住居としたことはなかったが、父祖の地、福島県を通して、東北を手さぐりで触れてゆくと、奄美も含めて「琉球弧」の島々とのあいだに、なにか古い日本人の心の底にあるようなものが類似の感情として流れているのでは

ないかと思う。

〔奄美・沖縄の個性の発掘〕昭和45年4月・全集(17)

加計呂麻島呑之浦での死を前提とした赴任と家族とともに移住した二〇年間、この二期にわたる奄美大島での発見とそれへの思考は、年月とともにそして書き続ける経験とともに島尾敏雄自身の内部へ、その奥底へとひたすら内面化していったようである。このことを若松丈太郎は次のように推測している。

一九五五年からの奄美大島での暮らしのなかで、島尾敏雄は、奄美に同化しそこに土着して、奄美を故郷として意識しようとしている節がある。しかし一方では、自分は土着できない人間だとの思い、東北地方のエミシの血が自分のなかに流れているとの意識、自分を故郷喪失者とみなす思いがしだいに強まって、彼の内心ではそれらがせめぎ合うことになった。たとえば、「自分の郷土を東北の一地方に限定してしまうことにこだわらざる」(「ふるさとを語る」)と言ったり、「故郷喪失者」と言ったり、「しかし自分の故郷だと呼べるところは一つもない」と言う一方、ここらの奥底の暗いところで「東北の重厚な低いつばやき

をきく」(「二つの根つこのあいだで」)とも言っているのがある。その内心のディレンマを解消する方策として奄美と(故郷)に、つまりは、南西日本と北東日本に架ける橋としてヤポネシアという概念を構築したのだろう。管見では、ヤポネシアという言葉が最初に出てくる島尾敏雄の作品は一九六〇年十月に発表した「宮本常一著『日本の離島』」である。(…:中略…)

六二年前、四十五歳のころ、島尾敏雄は岩手県の僻村で地域活動をしている大牟羅良が編集した『北上山系に生存す』を読んだ。この本は二十代初めぐらいの人たち十一人の生活ルポルタージュといった文章を集めたもので、島尾敏雄はそこに生活の確かさというものを読みとって共感し、創作活動のうえでの一つの手がかりを得ているように思われる。このことは、読後ただちに「大牟羅良編『北上山系に生存す』を書いただけでなく、四年後に発表した『文芸時評』でふたたびこの『北上山系に生存す』に触れていることから推測される。そうした読書などもあって、北東日本の(エミシ)の血を自分のなかにいつそうつつよく意識するようになったのである。

一九六七年は明治百年ということで中央ではその記念祝

賀行事がおこなわれた年である。これに対して、島尾敏雄は南西の沖縄のことばでは（ウチナンチュー）と、北東の（エミシ）と、つまりは南西と北東のふたつの（非ヤマト）からの異議申し立てをつよく意識したヤポネシア論と琉球弧の構想を深めていったのである。<sup>(15)</sup>

この若松論の射程には、島尾の父祖の地である福島県・南相馬、小高への回帰とそこで「東北」の発見が、奄美大島での経験に劣らない重みをもって把握され、またこれに寄りかかって自らの故郷を確かめたいという欲望をも抽出しようという企図がある。そしてこうした欲望が「故郷喪失者」と自ら任じているところから動機づけられているのも見やすいことであるが、こうした自らの欠損を自覚するにいたる契機こそが「ヤポネシア」と呼ぶより他に手段がなかった経験の、ほとんど脅迫的なありようを想い見させるのではないだろうか。あの「南島」が島尾敏雄に突きつけたものはこちらを遙かに遠ざけようとする言葉にならない異郷であったはずであり、それだからこそ逆に言語表現化を唆して止まない力を、表現者・小説家島尾敏雄として起動させてしまったのである。

「ヤポネシア」は「エミシ」と相俟って、表現文体を生成し

ていったはずであり、それは日本にありながら「もうひとつの日本」を探り出そうとする意志として現れつつ、私小説と呼ばれる求心力を逆方向へ促そうというもくろみを内包しているのではなからうか。すなわち、ここではない異郷を常に求めて止まない言葉の動きにおいて島尾敏雄による表現総体は測定されるべきなのである。

## 〔注〕

- (1) 柳原敏昭「東北と琉球弧」——島尾敏雄「ヤポネシア論」の視界——「当補記文化研究室紀要」第48集、二〇〇七（平19）年、東北大学大学院文学研究科・東北文化研究室。は日本中世史研究の分野からの言及として貴重であり、「昨今、「いくつもの日本」という歴史の見方が盛んにいわれる割には、その先駆である島尾のヤポネシア論をきちんと位置づけようという気配はあまり感じられない。特に島尾と同じような問題意識をもって研究を進めてきた東北史の研究者たちからは、全く顧みられない存在になっている。それでよいのだろうか」という問題意識を表明し、詳細な考察を展開している。
- (2) 小倉虫太郎「メタ・南島」文学論「トシオ」と「ミホ」の間から見えてくるもの、「ユリイカ・特集 島尾敏雄」（一九九八（平10）年八月）
- (3) 森本真一郎「島尾敏雄の帝国と周縁—ヤポネシアの琉球弧から—」（『社会文学』第21号、二〇〇五（平17）年）
- (4) 若松丈太郎「島尾敏雄における（いな）—その意識の変遷—」（福島

- (5) 自由人「北斗の会二〇〇八(平20)年10月」  
 花田俊典「ヤポネシアのはじまり―島尾敏雄の「日本」地図―」(『日本文学』一九九七(平9)年十一月)、また特にこの論考の後に発表された花田の「ヤポネシアの終わり―谷川健一の功罪―」(高阪 薫・西尾宣明編『南島へ南島から―島尾敏雄研究―』二〇〇六(平18)四月 和泉書院)は「ヤポネシア」概念と谷川健一の民俗学研究的批判検討を詳細に行った上で、この用語自体の「死語化」を提案している。
- (6) 谷川健一「島尾敏雄における南島」(『國文學』特集・島尾敏雄―宿命としての文学 一九七三(昭48)年十月)
- (7) 鈴木直子「島尾敏雄のヤポネシア構想―他者について語ること―」(『國語と國文學』一九九七(平9)年八月)
- (8) 同注(5)の最初の花田論
- (9) 東 琢磨「きっかけとしての「ヤポネシア」」(ユリイカ・特集 島尾敏雄)一九九八(平10)年八月)
- (10) 田仲康博「他者の眼差し」(ユリイカ・特集 島尾敏雄)一九九八(平10)年八月)
- (11) 高阪 薫「島尾文学にみる「ヤポネシア」の萌芽と形成」(ユリイカ・特集 島尾敏雄)一九九八(平10)年八月)
- (12) 安達原達晴「『魚雷艇学生』と(南島)の発見」(高阪 薫・西尾宣明編『南島へ南島から―島尾敏雄研究―』二〇〇六(平18)年四月 和泉書院)
- (13) 高阪 薫「ヤポネシア論の可能性―もうひとつの日本―の行方」(高阪 薫・西尾宣明編『南島へ南島から―島尾敏雄研究―』二〇〇六(平18)年四月 和泉書院)
- (14) 安原義博「島尾敏雄「島へ」：超現実とヤポネシア―小説の総合的な可能性―」(『論序説』(『芸術至上主義文芸』32 二〇〇六(平18)年十一月)
- (15) 同注(4)

○島尾敏雄作品の本文は『島尾敏雄全集』(晶文社)第十六・十七卷より引用し、初出年月の後に全集⑩・⑪と記した。なお 作品本文の初出年月は全集記載のまま和暦のみとした。